

つながり・学び・共に育つ子どもと親
ーペアレンティング・エデュケーション (Parenting Education) の概要と教育への取り組みー

尾原喜美子* 橋本和子* 川島美保* 千浦淑子* 植田啄佐* 杉本加代*

*高知大学医学部看護学科 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮¹⁾

Children and parents who are linked, learn, and grow together
---Outline of parenting education and the challenge to education---

Kimiko OHARA¹⁾ Kazeko HASIMOTO¹⁾ Miho KAWASIMA¹⁾ Yosiko TIURA¹⁾
Wasa UETA¹⁾ Kayo SUGIMOTO¹⁾
Dept. of Nursing, Kochi Univ. Kohasu, Oko, Nankoku City Kochi(783-8505) Japan

Abstract

The family has strong effects on the growth and development of children. The roles of family members whom they have close relationships with in their infancy and early childhood are particularly important. The society also exerts vital effects on the growth and development of children. Changes in the society and environment and diversity of values of people result in changes in the values of young people who will be parents and the tendency toward fewer children. The weakness of human of children by the community and child-rearing, and people increasingly develop neurosis due to the stress of child-rearing. Thus, evaluation of comprehensive support in consideration of the “process of becoming parents” and targeted to a wide range of people including “future parents” is necessary.

This report describes the concepts and methods of parenting education and evaluates what roles the family and society should play in the future in the rearing of children. It also presents part of the educational plans that the Department of Nursing, Kochi University School of Medicine has for the future.

We must orient ourselves to the future and endeavor to establish a society in which children are taken good care of, able to enjoy their unique and active lives, and sufficiently realize their potential in not only Kochi Prefecture but also in throughout Japan.

1. 緒言

乳幼児期は人格の基礎ができる重要な時期である。多くの子ども達と関わる中で子どもが10人いると感情の豊かな子どももいればそうでない子もいる。すぐに近づき遊ぼうと私の手を引いていく子どもがいれば、遠くからじっと見ている子どもがいる。まさに十人十色であるということがわかる。

心理学者エリクソン¹⁾は乳児期は、運動機能、社会的関係、概念的技能が急激に発達する時期であると乳幼児の特徴を説明している。乳児は環境を知覚し、養育者から反応を引き出すことを可能にするに能力を持って生まれてくる。特に養育者との信頼の獲得は、自己の欲求が満たされるという確信の情動的な感情であり、信頼は自分が価値あるものであるという経験的確信からあたたかさや喜びなどをうみ、希望という人間の基本的な強さと結びついていると述べている。乳児期を通じて生まれた希望は、危険に直面したときにポジティブな感覚をもたらし、人生を通して信頼する能力や信頼の感覚は、新しく模索するエネルギーや困難な挑戦を解決できるという希望をもたらす。両親との相互作用の中で生まれた人を信頼するということが、豊かな人間関係を築くための基本的なことであり、それを獲得するのは乳児期であるといえる。

また、乳児期は育児のスタートでもあり子どもと家族にとり非常に重要な時期といえる。この子どもの生涯にとって非常に価値のある子育ての時期に家族全員が責任と誇り、喜びや楽しみを持って子どもを育てることが大切である。佐々木²⁾は「子どもへのまなざし」の著で、子どもを育てるということは何よりも基礎が大事であると述べている。乳児期の育児というものは建物でいうとまさに基礎工事である。奈良の法隆寺は建立されてから1300年を経た今でも、40回以上の大地震が近畿地方にあっても、32mの高さと120万kgの重量でありながら沈むことなく建っている。これはがっちりした基礎づくりにあった。乳児期はまさにこの人間の基礎づくりの時期であり、基礎づくりを間違ってから大人になってから問題が生じるということは当然あるでしょう。人間の基礎づくりの乳幼児期の育児はやり直しが非常に難しく、非常に責任の重いことですと説明している。子どもがどんな人格の人間として成長するのかを決定するのが乳児期といってもよく、その時期の子どもに関わる周囲の大人達の責任ある自覚が重要といえる。

乳幼児期に限らず子どもにとって家族は、人間の成長発達に強い影響力を持っている。乳幼児期の関わりは主として家族である。子どもの生育環境としての家族は大きな影響力を持つが、子どもの成長に伴って社会からの影響も重大である。わが国の核家族化の急激な進行は、日本の伝統的家族であったイエから人々を解放し、夫婦家族へと移行した。従来あった家族世代間の交流や地域の人々、子ども同士のつながりは希薄化した。従来の家族の役割や機能は変化し新しい形に変化しようとしている。3世代家族の中で培われていた祖父母や親、兄弟の構成が変化し家族間の結束や絆は薄れ、家族のライフスタイルに伴う課題が達成されない危機状態に陥っているともいえる。

このような時代であるから、今まさに「親となる過程」「将来の親」となる人々をも含め社会の人々も射程に入れた包括的な援助を考えていかなければならない。

そこで、本稿では、ペアレンティング・エジュケーション (Parenting Education) の概念とその方法を紹介し、子どもの育ちにおいて重要な役割を果たす家族や社会が、今度どのようなべきかについてまとめることとした。

2. ペアレンティング・エジュケーション (Parenting Education)

1) ペアレンティング・エジュケーションの定義

ペアレンティング・エジュケーションは、アメリカの心理学者ゴードン (Gordon, T) が 1963 年に親教育のプログラムとして始めた。小島³⁾によると、児童期の親子関係への支援が重視され、最近地方自治体と専門機関、あるいは母親自身など様々なレベルでの「ネットワークづくり」が注目されているという。児童福祉の領域では、児童虐待が社会問題化する中で「親教育」や「親支援」の必要性が叫ばれ、その支援方法が模索され始めてきている。しかし、日本での「子育て支援」は、出産後の親子関係を対象としたものや児童虐待への取り組みが中心である。親にとって子供との関係は、子どもが生まれてから始まるのではなく、結婚や妊娠以前から人間の生涯発達という視点に立った一貫した親性・養護性育成への支援が大切である。子育てに関わるスキルを学ぶ機会が減りつつある現代社会においては、出産準備教育などを通じた「親になる」過程への援助だけでなく、あらゆるライフステージにおける個人の性的発達への援助という視点も大切である。こうした援助を考えていく際に、家族の変化やセクシュアリティの多様化といった問題も避けられない。「将来の親」も射程に入れた包括的援助は、欧米では一般的にペアレンティング・エジュケーション (Parenting Education) あるいはペアレント・エジュケーション (Parent・Education) と呼ばれている、と紹介している。

また、同文献で欧米では非常に多種多様なペアレント・エジュケーション (Parent・Education、以下 PE と略す) があり、アメリカでは 1960 年代から心理学を中心とする理論に基づいて、PE が展開されてきたと報告されていた。イギリスでも 1980 年代以降、親自身の自助グループといったボランタリーセクターを中心に PE が広がりつつある。PE とは、「親、あるいは将来の親が、自分自身及び社会的・情緒的・心理的・身体的ニーズを理解し、両者の関係を高めることを援助するための一連の教育的、支援的活動」と定義されている。PE は、「地域コミュニティを基盤とした子どもの発達及び子育てのためのサポータティブな生活環境創出の一環」として位置づけられている。つまりペアレンティングとは、「連続的過程であり、一人の人間の発達に関わる親、地域、学校などを含む相互行為過程の総体なのである」と説明している。イギリスの PE は、親のスキルの欠如を指摘・指導するのではなく、むしろ親をエンパワメントすること、親の自尊感情を高めることを基本原理としている。従って、親に対するサポートと、ペアレンティングに対するサポートは重複する。しかしこの2つのサポートは、戦略として異なる目標を持ち、親へのサポートは親個人としての生活全体 (夫婦関係、仕事とのバランスなど) への援助を目的としているのに対して、ペアレンティングへのサポートは、子どもをめぐる人間関係全体を射程に入れる。従ってその対象には、親のみならず、子どもを取り巻く関係者全てが含まれる (祖父母、兄弟、学校の先生など)。また、PE のプログラムは、対象者の特定のニーズや状況に即した内容 (ジェンダー、セクシュアリティ、父親を対象としたプログラム、仕事との両立の問題、二人目の子どもの出産、再婚カップル、シングルペアレント) をその特徴としており、一般的な内容では効果がないとされている。PE は多様な理論的基盤に以てられているが、PE が登場した社会的背景として、親であることの社会的意味づけが大きく様変わりしてきたことと関係がある。PE とは、「ジェンダー論」と「近代家族論」とがインターフェイスする領域であり、こうした社会的コンテクストを明確にするために、「ジェンダー論」と「近代家族論」という、2つの問題が重なり合う領域として PE を捉えていた。

2) 日本での取り組み

日本では親への援助として妊娠中の女性やカップルや家族を対象に出産準備教育が以前から行われていた。しかし、現代では従来の出産準備教室における一方的な講義形式に方法ではなく「当事者主体」の参加型、体感型で援助・指導を行う方法に変わってきている。

この出産準備教育とは別にアメリカの心理学者ゴードン (Gordon,T) が 1963 年に親子の関係改善と問題予防のための親教育のプログラムとして開発した親業のプログラムが紹介されている⁴⁾。日本では 1980 年に親業訓練協会が設立され、親業訓練インストラクター (指導者) の養成を行っている。日常生活の中での子どもとのコミュニケーションについて親が学習する方法である。親子の間に問題が起こってから治療法としてよりも、問題が起こる前の、いわば予防的な意味を持っている方法が紹介され親業訓練として取り組まれている。

3. 変化している現代の家族

1) 社会の変化と子どもの環境

子どもを取り巻く社会環境の変化では、まず家族形態の変化があげられる。特殊出生率は 1.3 を切りその急激な減少には目を見張るものがある。一人の女性が 15～49 歳の間に子どもを産んだと仮定した場合の平均出生児数が 1.3 ということは一対の男女が 1.3 人の子どもしか産出しないことであり、次の時代に向けて二人がかりで一人と半分の子孫しか送り出せないということである。加速化する高齢社会を支えることなど到底できず、大きな国家としての課題である。こうした出生率低下は欧米先進諸国や急速な経済的発展を遂げた諸国においては共通に見られる減少とはいえ、日本ではあまりにも急降下が著しい。こうした出生率低下の要因は、結婚を先送りするもの、結婚しないものの増加と結婚したカップルが一生の間に産む子どもの数が減少、の 2 つの要因に分けられるが、この背景には、一般的に結婚・出産に対する価値観の変化、女性の職場進出に伴う子育ての機会減少、子育てにかかる費用の増大、出生抑制技術の普及などの影響が指摘されている。

次に家族の生活スタイルの変化である。生活の価値観の多様化により色々な生き方を求めるようになってきた。定職に就かずニートやフリーターの出現など、社会の経済状態の不安定さも影響し今後益々増加するともいわれる。第3に女性の就労意識変化である。女性の就業率の上昇、別居世帯の増加など従来の男女の役割に対する意識も変化し、女性も働くことで生きがいを見出し社会的役割を担おうとする意識が高まっている。こうした大人達の生活環境の変化からくる影響を最も強く受けるのは子ども達である。子どもの虐待やいじめ・不登校、受験戦争や IT による多情報化、携帯電話やメール、パソコンの普及により新たな事件・事故の発生など社会の変化は子どもの環境に大きく影響を与えた。大人達の生活が変わることにより否応なく変わらざるを得ないものは子ども達の生活である。

2) 家族の変化と家庭の問題

出生率低下の程度は地域により違いがある⁵⁾。親を取り巻く環境の変化と出生率との関係は、従来の 3 世代同居が減ったこと、地域社会における相互扶助が希薄になっている、夫の仕事が忙しすぎる、家庭内や地域で子育てに関われる人や時間の制約が顕著である、女性の就業が増えている、経済停滞が続く収入について明るい見通しがもてない、教育費など子育ての費用が大きいなどがある。

従来の 3 世代同居家族から核家族が多くなった現在、3 世代家族時代の家族成員役割や家族

の機能は衰退し、夫婦と未婚の子どもの家族の中で家族役割や機能は大きく様変わりした。一般に社会は次世代を担い社会を支える子どもの育成を家族に期待する。しかし、家族が十分な子どもの育成をしなくなれば社会は混乱し問題が発生する。少子化は社会の維持存続が難しいという危機感から社会問題となり、子どもの暴力や非行は家族に問題があるとみなされる。現代の家族はどの家族とも大きな危機に瀕しているといわれる。夫婦に不和や離婚、親と子の断絶による世代的対立や家族内暴力、子育て・子殺し、家出、蒸発、非行、老後の生活不安などいわゆる家族病理現象が多発している。現代社会においての家族はきわめて不安定でいつ大きな危機的出来事が生じてもおかしくない状態といえる。

3) 家庭教育と親の責任

子どもの教育を考える場合、教育に当たるものが子どもをどのように考えているか、ということは重要である。子どもをどのように考えるは、どのように子どもの可能性を見いだしていくかの指標となる。私は、ここでは「子どもは生まれてから、子ども自身の持つ力と関わる人々との相互交流から成長・発達していく存在である」と捉える。子どもは生まれたときから良くなろうとする存在であり、最初から悪くなろうとするものではない。子どもは生活環境や教育環境、育児や教育によって能力を伸ばし良くなろうとするのである。子どもに関わる親や教育者がどのように関わるかによって子どもの成長・発達は異なってくる。つまり、親が過度の期待をしたり、「良い点をとったら欲しいものを買ってあげる」という関わり方は子どもの良さよりはむしろ欲望の心をかき立てることとなる。親の子どもへの期待は親の「欲」の現れであり、子ども自身が良くなることを妨げることになる。親自身が子どものためと思っていることでも、結構親の「欲」や価値観の押しつけからでた行動であることに、親自身が気づいていないことが多い。

家庭教育の中で子どもへの関わりは子どもを良くすると同時に親自身も良くなるためにあるともいえる。家庭での教育は子どもに生き方を教えることであり、生活できる人間の育成といえる。子どもは家庭教育で自分のやるべきことを自分で考え、自分で行動し、自分が責任とれる存在として成長していくのである。つまり、基本的生活習慣の自立を通して子ども自身が社会の中で自律して生活するために必要な事柄を学んでいくのである。親は子どもの基本的生活習慣の確立への援助を通して親自身も成長するのである。

4. つながり・共に学ぶ子どもと親

1) 社会との交流

昭和の初期は子ども達には自然の遊び場が存在した。広っぱ、原っぱがあった。路地あり山あり谷ありで、自然がいっぱいだった。子ども達は群をなして走り遊び、疲れてぐっすり眠った。その地域には必ず地元の爺・婆がいた。子ども達の遊び見守り成長を願う地域のお年寄りがいた。子どもは手をかけなければならないが、手をかけすぎても成長しない。危険なことはだめと制止させ、仲良く仲間で遊ぶことの楽しさや方法を教える大人達がいって、地域で子どもを育てていた。個人の子や孫であると同時に地域の子ともわが家の子ども同様に温かく見守っていた。子どもは遊びの天才でどんな場所でも色々な遊びを見だし楽しんでいった。しかし、今、地域から子どもの姿が消えた。以前は日曜日になると子ども達が集まりにぎやかに遊ぶ声が聞こえたものだ。住宅地の普及は緑地や空き地を少なくし、車社会は遊び場を削り取っていた。塾やけいこ事に追われる毎日からは遊ぶ時間を少なくし、ゲームやパソコンは家の内で

遊ぶ子どもを多くした。群れて仲間と遊ぶにも時間や遊ぶ場所がなく、連絡はメールや携帯電話でやりとりし直接出会って集団で遊ぶ必要性を奪ってしまった。

各地で地域の活性化対策や子どもの安全対策として色々な取り組みが計画されている。子ども達に屋外での遊びの楽しさを教え地域に呼び戻そうという企画もある。子どもをめぐる凶悪犯罪が多発する現代であるからこそ、なおさら地域が一体となって子どもを護る取り組みとして発展させていかなければならない。

2) 親同士の交流

高度経済成長から始まる産業構造の変化は急速な都市化をもたらした。農村部から都市部へ人口が移動し、都市の人口は膨れ上がった。都市に住む人々は、マイホームを持つ夢をもち一心に働き住まいを求めた。土地の高騰から多くの人々は職場から遠く離れた地域に住居を構え、長時間かかって通勤するようになった。都市には密集した大型高層のマンションが建ち多くの人々が生活を始めた。そこに住む人々は近所、地域の人々には無関心で、互いに「隣は何をする人ぞ」の人が多く、地域の人々との交流は少なかった。社会・地域での交流不足は当然親同士の交流を少なくする。親・子どもとも多忙な生活の中で、隣近所の人々とは、挨拶を交わす程度の関わりで、生活の中に踏み込んだ、いわゆる世間話をするつきあいは少ない。

地方から都会に出て来た夫婦と子ども一人の核家族世帯で、夫は長時間かかって通勤し朝早くから夜遅くまで働く。夫は時には夜勤があり帰らないこともある。妻はほとんど一人で子育てし、子どもの病気や検診、家事全てを一人で行っていた、たまの休日でも、夫は「疲れた」と家でごろごろするばかりでショッピングやレクリエーションに出かけることもなかった。子供が産まれてから半年あまりたった頃、頑張っていた妻の状態に変化がでてきた。「眠れない」、「イライラして腹が立つ」、「夫を見ると吐き気がする」、「空腹で泣いている子どもを放っておく」、「一日中おむつを代えない」などの状態となり、気力がなく何をしても「疲れた、疲れた、もうだめだ・・・」を繰り返すようになった。

この事例は卑近なことでない。いつ私たちの周りで起こるとも限らない。この事例の場合、隣近所の交流や同じ子を持つ親同士の交流があり、つまらない愚痴でもいいから話のできる友人がいたなら、そこで新たな方向が見いだせていたかもしれない。

3) 子どもと共に育つ親・社会

近年、家庭での教育力が不足していると指摘される。子どもの成長・発達にとって家庭の果たすべき役割は重要である。様々な理由により家庭の教育力が低下している現在、家庭個々の努力もさることながら、個々の家庭の努力だけでは解決できない困難な問題もある。地域社会における家庭間の交流、家庭と諸機関・組織の連携により問題解決の方向を探る努力も必要である。親同士の交流は子ども同士の交流を深め、子ども・親の交流は地域の輪を広げるという循環型に交流することで親、地域の人々が協力してお互いに子育てや教育観、子育て方法や教育方法について意見交換、情報交換することは家族、子ども、地域の人々にとって新しい発見を見いだすことができる源となる。

5. ペアレンティング・エジュケーション／トレーニングの紹介

前項での PE の定義で、PE とは、「親、あるいは将来の親が、自分自身及び社会的・情緒的・心理的・身体的ニーズを理解し、両者の関係を高めることを援助するための一連の教育的、支

援的活動」と定義されていた。ペアレンティングとは、連続的過程であり、一人の人間の発達に関わる親、地域、学校などを含む相互行為過程の総体である。親をエンパワメントすること、親の自尊感情を高めることを基本原理とし、親に対するサポートと、ペアレンティングに対するサポートは重複する。しかしこの2つのサポートは、戦略として異なる目標を持ち、親へのサポートは親個人としての生活全体（夫婦関係、仕事とのバランスなど）への援助を目的としている。ペアレンティングへのサポートは、子どもをめぐる人間関係全体を射程に入れる。従ってその対象には、親のみならず、子どもを取り巻く関係全てが含まれる、と説明した。

小島は、まず、親へのサポートとして、妊娠中の女性とその夫を対象とした出産準備教育が代表的であると述べている⁶⁾。親になる人は成長過程の中で問題解決していく能力を培った人であるという認識に立ち、未知なる体験である妊娠・出産・子育てに対して、これまでの問題解決スキルを応用し活用していくことができるような情報の提供、サポートを展開するのである。男性に対しての教育プログラムも開発されている。

ゴードンにより開発された親子の間に問題が起こる前の、いわば予防的な意味を持つ方法として紹介されている親業訓練の主要な概念と手法を紹介する⁷⁾。主要な概念と手法は次の4つである。

- (1) 行動の四角形：子どもの行動を客観視する枠組み。子どもの行動を「子どもの問題」「親の問題」「問題なし」の3つの領域に分けることで、各々の行動に対する親の感情の整理と、各行動に対応するための親の態度の決定の基礎を提供する。
- (2) 能動的な聞き方：「子どもの問題」に属する子どもの行動に対し、問題解決を援助するのに親が行う対応
- (3) 私のメッセージ：「親の問題」に属する子どもの行動があったときに親が行う対応で、「わたし」を主語にした話し方を指す。行動・影響・感情の三部で構成される。
- (4) 勝負なし法：親子の間に対立がある場合に、六つの段階を経て親子で話し合う。親子が一緒に対立を解消していく方法。六つの段階は①問題を明確にする、②考えられる解決策を出す、③解決策を評価する、④双方が納得いく解決策を決定する、⑤解決策を実行に移す、⑥結果を評価する、のプロセスで相互の対立を解消していく。

以上を組み合わせた親業訓練方法講座が開講されている。愛情と理解に満ちた親子関係の実現をめざし、親子関係の基盤となるものは単に「愛情」だけでなく、「愛情」と「理解」の両者によって親子が共に人間として成長し生きていくことができると説明している。

知性の発達は感情の豊かさに支えられ子ども自身の知性は感情を土台として伸びていく。子どもの生活での感情が豊かに満たされることで知性も充分に発達する。また、子どもも親もそれぞれの「すばらしさ」と「希望」を持ちそれぞれユニークな存在として自分なりの欲求を持つ。「子どもだから」「親だから」という枠組みで捉えるのではなく、一人の人間として異なった存在として尊重することである。そして、子どもの問題がもし起こったとしたら、「問題」としてそれだけ適当に処理しようとせず子どもの欲求—家庭—友達—社会といった子どもを取り巻く様々な環境の中で全体的状況をつかめ問題解決の方向に向かうことが大切であるとまとめている。

ADHD(Attention Deficit Hyperactivity Disorder 注意欠陥・多動障害)のペアレント・トレーニングがアメリカのUCLA 神経精神医学研究所(NPI)により開発されている⁸⁾。このプログラムは毎年数百の家族を援助しているという。ペアレント・トレーニングというのはADHD児の「親のための」対処法プログラムで、家族が正しいしつけの方法を学ぶための方法で、こ

の方法は行動変容の理論に基づいている。子どもの行動に注目し、子どもの良い面を増やし広げるための具体的な方法を訓練を受けることで日常生活の中で身につけていくのである。“むずかしい子にやさしい子育て”というキャッチフレーズの基で、ぐずる、かんしゃく、くちごたえをする、汚いことば、すねる、そんな子どもにどのように関われば穏やかな生活が送れるかを提供している。家族がしてほしい行動を増やし、してほしくない行動を減らし、許し難い行動をなくす。どんなにむずかしい状況にもこの方法を学ぶことで対応できると説明している。

アメリカ・シアトル在住の教育者、エリザベス・クレアリーによって開発された親のための学習プログラムとしてスター・ペアレンティング (STAR・pearenting) がある。⁹⁾

これは、人は生まれながら親になるのではなく学習し、練習することによって親になっていくのだという考えのもと研究が進められて開発された教育方法である。ペアレンティング (親をすること、親としての技能、親子のあり方) の方法で、子どもと接していて何か問題が起こったときにそれにうまく対処するためのプログラムである。このプログラムは問題解決のための4段階と5つのポイントを示している。

4段階とは、①Stop and focus(立ち止まって問題を見直す)、②Think of ideas(アイデアを考える)、③Act effectively (効果的に活用する)、④Review, revise, reward (再検討, 修正, ほうびを与える) であり、STAR parenting としている。

5つのポイントは以下のとおりである。

- ① 問題を避ける：状況を変える、子どものストレスを減らす、代案を2つ出す
 - ② 良い行動を見つける：注目する、ほめる、ほうびをあげる
 - ③ 感情を認める：簡潔に聴く、積極的に聴く、空想で応じる
 - ④ 適切な制限を設ける：的確なルールを定める、ルールを破ったときに結果を引き受けさせるより、寄りよい方法を見つける
 - ⑤ 新しいスキルを教える：手本を示す、具体化する、正しくやり直させる
- の5つを示している。特に幼児期の子どもを持つ親へのエンパワーをめざしている。

6. 考察

社会環境の変化は母子を取り巻く生活を大きく変化させた。育児不安や育児困難現象、子どもの虐待や不登校など多くの社会病理が発生している。家族機能が弱体化し、家族の絆やつながりが希薄化している時代だからこそ、ペアレンティング・エジュケーションのできる専門性を持った人材の育成を急がなくてはならない。

ペアレンティング・エジュケーションの大きな目的は次世代育成と家族支援であり、ペアレント・エジュケーションを、地域コミュニティを基盤とした子どもの発達及び子育てのための支援、として位置づけ、出生から老人になっても、いわゆる胎児からお年寄りまで、あらゆるライフステージにおける個人の発達を視野に入れて、「親になる過程」「将来の親」になるための、一人の人間の発達に関わる親、地域、学校などへ総合的な支援が援助できる人材の育成を行うことが急がれる。親の生きる上でのスキルや子育てのスキルの向上は、親自身がエンパワメントできることであり、親は自信をもつことで自尊心が高まり、夫婦、家族が協力して支え合っていける関係づくりに発展していくと考える。この支援のためのリーダーづくりがペアレント・エジュケーションである。地域の中核となって地域の問題に支援・対応しながら家族・育児の色々な課題に挑戦的に取り組み、家族が自律して生活できるよう支援すること、また子どもづくり、親づくりを通して地域の人々の交流を企画し地域の活性化につながる方法、対策

を創造的に考えることのできる人材を育てることが重要である。

当大学での取り組みとしてペアレント・エジュケーションのできる人材の育成を検討している。高知県の特殊性や特徴を活かし、「家族再生」「母子安全」「少子化対策」「高齢化対策」を4本柱に据え、「家族の自律」と「地域の活性化」をめざし、地域貢献を視野に入れた具体的な取り組みのできる人材の育成をはかりたい。人々の健康に関わる問題や家族・地域の問題をより明確化し、具体的な活動に直結するより実践的な活動を行う事を計画する。地域密着型の活動へと拡大するために、家族・地域の問題をより明確化し、具体的な活動にどのように結びつけていくか、現在模索中である。高知大学医学部のもつ医療・看護の専門性を活かした取り組みとして、医療・看護、福祉、教育、リハビリなど人々の健康レベルに対応でき、生活全般にわたる指導・援助ができることをめざしている。付帯的には出前講義や相談支援室の開設、育児ルームや地域のお年寄りとの関わりイベント参加、ボランティア活動の強化など検討中している。

家庭における親として教育機能がいくら低下したとはいえ、子どもへのしつけを通して基本的生活習慣の自立や人間としての基礎づくりに大きく影響するのは家族特に両親である。親も一人の人間としてしつけや教育を通して成長していく。親も育児を通して学ぶ存在であるといえる。親も子ども学ぶ存在として、共に成長し続けるのである。子どもの育児を通して親自身も人間として自己実現をめざすことができるのである。

ADHD のペアレント・トレーニングは、ADHD 児の「親のための」対処法プログラムで、家族が正しいしつけの方法を学ぶための方法である。この方法は日本でも取り入れられて、決められた研修を終了したインストラクターにより、日本各地で母親や家族、そしてリーダーを対象として研修が行われている。母親や家族が日常生活でどのように子どもに関わるか、その行動変容を起こそうとするものである。子どもの行動に注目し、子どもの良い面を増やし広げるための具体的な方法の訓練を受けることで日常生活の中で親自身が関わり方を身につけていくのである。

どの子どもも親からの注目を期待している。親は子どもの行動を変えるために子どもの注目の力を用い、子どもに肯定的な注目（ほめること）を行うことで行動変容を期待する。ほめることは、親自身が子どもにしてほしい、子どもにもっとやらせたい行動を増やすことであり、無視することも子どものしてほしくない行動を少なくする援助方法のひとつであると ADHD のトレーニングでは述べている。ADHD の子どもを対象としたとはいえ、その内容は全ての子どもに通用する。子どもは親深い愛情を持って関わってくれる事を肌で感じ、親の心の安定は子どもに伝わり、子どもは安定した両親の元では健康的にすくすくと育つのである。

本稿では、ペアレンティング・エジュケーション (Parenting Education) の概念とその方法を紹介し、子どもの育ちにおいて重要な役割を果たす家族や社会のあり方について分析した。また、高知大学医学部看護学科が今後構築しようとしている教育の一環を紹介することで今後の課題の明確化を図った。課題山積し今度の方向性が見いだしていくのは簡単なことではない。しかし、来るべき日本の将来、高知県の未来に生きる子ども達の人権が尊重され、生き生きと生きられ一人一人の可能性が十分発揮できる社会に指定かなければならない。私たちは今できる限りの力を持って未来を志向し、これからの社会を気づいていかなければならない。

7. 結語

ペアレンティング・エジュケーション (Parenting Education) の概念とその方法の紹介、

家族や社会、教育のあるべき方向についてまとめた結果以下の結論を得た。

- 1) ペアレンティング・エジュケーションとは、「親、あるいは将来の親が、自分自身及び社会的・情緒的・心理的・身体的ニーズを理解し、両者の関係を高めることを援助するための一連の教育的、支援的活動」と定義されている。
- 2) ペアレンティング・エジュケーションの目的は次世代育成と家族支援であり、地域コミュニティを基盤とした子どもの発達及び子育てのための支援として位置づく。
- 3) あらゆるライフステージにおける個人の発達を視野に入れて、「親になる過程」「将来の親」になるための一人の人間の発達に関わる親、地域、学校などへ総合的な支援が援助できる人材の育成が急がれる。
- 4) ペアレンティング・エジュケーション活動は、医療や看護、教育や心理、福祉や保育など多くの専門者、関係者が連携して具体的内容を検討し実践的な技術として開発を進めなければならない。

引用・参考文献

- 1) バーバラ R ニューマン/ フィリップ R ニューマン著、福富護訳、1997、新版 生涯発達心理学 Development Through Life, 川島書店 ; p110-111.
- 2) 佐々木正美、1999、子どもへのまなざし、副音館書店 ; p12-15.
- 3) 小島理恵子、斉藤真緒、2003、ワークショップ「ペアレンティング・エジュケーションの理論と実際」—日本における Parenting Education の可能性、立命館人間科学研究 5.
- 4) ゴードン・T、近藤知恵訳、1998、親業 (PET)、大和書房.
- 5) 厚生労働省：厚生労働白書平成15年版
- 6) 前掲 3) p 240-242
- 7) <http://www.oyagyo.or.jp/oyagyo/oyagyo-02html/>
- 8) シンシア・ウィットム 上林靖子他四名訳、2005、ADHD のペアレント・トレーニング、明石書店.
- 9) <http://plaza.rakuten.co.jp/starparenting/8001>
- 10) 渡辺正樹、Dale W.Evans、1998、米国カリフォルニア州における学校教育—健康教育ガイドライン「ヘルス・フレイムワーク」の概要、日本公衆衛生誌 ; 46(3).
- 11) 筒井真優美、2004、小児看護学 子どもと家族の示す行動への判断とケア、日総研;p81-84.
- 12) 杉下知子、2000、家族看護学入門、メジカルフレンド社 ; p6.

(平成18年2月1日受理)